日本語母語話者による英語の属格関係代名詞節の習得過程に見られる名詞句の接近度階層の影響と母語転移

Effects of the Noun Phrase Accessibility Hierarchy and the L1 transfer on the acquisition process of genitive relative clauses by Japanese learners of English

坂内　昌徳
福島工業高等専門学校一般教科
Masanori Bannai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2011年8月22日受理)

This paper reports on a preliminary experiment where Japanese learners of English (JLE) were tested by a Japanese-English translation task on their ability to form genitive relative clauses. The ratio of correct responses indicated that the JLE's linguistic knowledge on relative clause formation develops under the sanction of the universal property manifested in the typological hierarchy for relative clause constructions (i.e., Noun Phrase Accessibility Hierarchy).[1] The constructions erroneously produced by the participants will be argued to point to their reliance on the clause formation strategy of noun-modifying constructions in Japanese, which heavily depends on semantic/pragmatic relationships between the head noun and the "relativised" NP within the complement clause.

Key words: relative clauses, noun-modifying constructions, Japanese learners of English

1. はじめに*

名詞句を節が修飾する構造（本稿では関係詞が顕在的に表出しない場合も含めて「関係節構造」と呼ぶ）は自然言語に広く一般的に見られるが、それらの生成原理は言語間で異なる特徴がある[2]。いわゆる関係節内の名詞句のうち、どの名詞句が関係代名詞（あるいは空演算子）として取り出されることが許されるかという点で言語間に階層性が存在することが発見されてから久しい(Noun Phrase Accessibility Hierarchy (NPAH))。第二言語(L2)習得研究においては、この階層性と目標言語の特性との関係に焦点が当てられてきた[3]。すなわち、目標言語のある関係代名詞節タイプ A が別のタイプBよりも NPAH の中で上位である場合、タイプBを習得した L2 学習者の中間文法にはタイプAが含まれるが、逆にタイプAを習得したということがタイプBの習得を保障はしない、という実験結果および主張である。しかし、英語だけとっても許容される関係代名詞節の全てのタイプについて L2 学習者のデータを収集し比較した研究はなく、一部の研究報告を除けば調査対象となっている関係代名詞構文のタイプは限定的である。特に属格関係代名詞(i.e. whose + NP)が導く節の習得についてはあまり研究対象となってこなかった[1)]。また、日本語母語話者の英語学習者(JLE)に焦点をしぼった研究は少なく（cf. Izumi 2002）[4]、さらには L2 学習者が関係代

*本稿に報告するデータおよび議論の一部は第 50 回大学英語教育学会シンポジウム「異なる文法項目への明示的指導の実証的研究」で発表したものである。

[1)] 伊藤(2001)[5]は NPAH の枠組みに基づいて日本人英語学習者を対象に文法性判断タスクを用いた調査で、関係代名詞の習得全体の中で属格関係代名詞句の習得が NPAH による予測どおりにいかないという結果について、属格関係代名詞句が他の関係詞とは異なってとらえられている可能性があると主張している。しかし、伊藤(2001)は学習者の母語である日本語の連帯修飾節の構造が彼らの属格関係代名詞句を含む文における文法性判断に影響を与えていた可能性については考慮していない。

名詞節の習得の過程でおかす誤りと母語(L1)の特性との関わりについてはほとんど研究がされていない(cf., Schachter 1974)[6]。

本研究では言語間における普遍的原理であるNPAHとL1の特性がJLEの属格関係代名詞節の習得にどのように影響しているかを、初中級学習者の産出データに基づいて考察する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第２章で関係代名詞節の構造について英語と日本語の間の違いを概観し、第３章でこれまでに行われてきた第二言語習得研究の成果について確認し、未解決の問題を指摘する。第４章では本研究のリサーチクエスチョンを示し、第５章で実験内容について述べる。第６章では、実験結果から、日本語話者が英語の関係代名詞構文を習得する過程でみられる普遍的な原理の利用とL1の影響、および第二言語習得一般に示唆することについて考察する。

2. 日英語の関係代名詞節

まず本章では日英語の関係代名詞節の特性を概観する。下の(1a-d)は本研究で扱った英語の関係代名詞を含む文の例である。（「e」は空範疇を表し、実際の実験で参加者のデータには句標識や「e」の文字は含まれない。）

(1) a. John met [a girl$_i$ [$_{CP}$ who$_i$ [$_{IP}$ e$_i$ had a big shopping bag]]].

b. The police arrested [the thief$_i$ [$_{CP}$ whom$_i$ [$_{IP}$ John found e$_i$]]].

c. John married [the girl$_i$ [$_{CP}$ whose mother$_i$ [$_{IP}$ e$_i$ was from Canada]]].

d. Tom visited [the teacher$_i$ [$_{CP}$ whose textbook$_i$ [$_{IP}$ he found e$_i$ in the classroom]]].

理論的にいくつかの分析方法が提案されてきているが、英語の関係節の生成にはwh-句（または空演算子）の義務的な移動が含まれているとする点では一般的に合意が見られる[7]。(1a)は主要部名詞句 a girl を修飾する関係詞節内の主語名詞句が関係代名詞として抜き出されて補文の指定部に移動した例である。これと同様に(1b)では補文内の動詞 found の目的語の位置に生成された名詞句が補文の指定部に移動していると考えられている。(1c), (1d)の場合もそれぞれ移動されている名詞句がwhose+NPの形をとっている点を除けば(1a), (1b)と同様である。このwh-句の移動は関係節となっている部分を主節に連結させる前の形に戻してみれば明らかになる。例えば(1b)は下の(2)のように２つの文に分けることができる。

(2) The police arrested the thief$_i$. John found him$_i$.

このように英語の関係節の生成には義務的なwh-移動が関わっているが、関係節となる補文内のどの名詞句が移動される（すなわち、関係詞として取り出される）ことが許容されるかという点に着目すると言語間に階層性が見出される。Keenan & Comrie (1977)はこれを名詞句の接近度階層（Noun Phrase Accessibility Hierarchy (NPAH)）と名づけた。

(3) SU > DO > IO > O PREP > GEN > O COMP

a. John saw [the girl$_i$ [who$_i$ [e$_i$ had a big shopping bag]]]. （主語の関係詞化: SU）

b. John met [the girl$_i$ [who(m)$_i$ [Ken loved e$_i$]]]. （直接目的語の関係詞化: DO）

c. John met [the girl$_i$ [who(m)$_i$ [Ken gave e$_i$ his book]]]. （間接目的語の関係詞化: IO）

c. John met [the girl$_i$ [who(m)$_i$ [Ken talked about e$_i$]]]. （前置詞の目的語の関係詞化: O PREP）

d. John met [the girl$_i$ [whose father$_i$ [e$_i$ wrote a famous book]]]. （属格名詞句の関係詞化: GEN）

e. John met [the girl$_i$ [whom$_i$ [his sister was taller than e$_i$]]]. （比較の対象の関係詞化: O COMP）

ある言語でこの階層のある位置で関係詞化が可能であれば、その言語ではそこより左の全ての位置からの関係詞化が可能である、というものである。英語では(3a-e)の全てのタイプの関係節を許容することに注意したい。

次に(3a-e)の英語の関係節に相当する日本語の文を見てみたい。

(4) a. タロウは[[大きな買い物袋を持った]少女]を見かけた.

b. タロウは[[ケンが愛した]少女]に会った.

c. タロウは[[ケンが話した]少女]に会った.

d. タロウは[[父親が（ある）有名な本の著者である]少女]に会った.

e. ?タロウは[[彼の妹（のほう）がより背が高い]少女]に会った.

最近までの比較統語論研究では日本語の名詞句修

飾節構造について英語の関係節と同様の分析がとられてきた[8]。すなわち、関係節の主要部名詞（英語で言う先行詞）が指し示す空の名詞句「e」を名詞句修飾節内の空所(gap)に想定し空の演算子「Op」として CP 指定部に移動したと考えるのである。例えば(4a), (4b)の例はそれぞれ(5a),(5b)のようになる。

(5) a. タロウは[[Op_i [e_i 大きな買い物袋を持った]] 少女 $_i$]を見かけた.

b. タロウは[[Op_i [ケンが e_i 愛した]]少女 $_i$]に会った.

しかし、日本語には少なくとも英語のように顕在的な関係代名詞は存在しない。それに加えて、(5a-b)の分析では「少女」と「大きな買い物袋を持った」または「ケンが愛した」の部分との間の関係を示す要素が何もない。同じ分析を(4c)に適用すると(6)のようになるが、主要部名詞句「少女」と関係節内の叙述内容との関係が曖昧で、少なくとも(6a-b)の 2 種類の解釈が可能である。

(6) タロウは[[Op_i [ケンが e_i 話した]]少女 $_i$]に会った.

a. Taro met the girl whom Ken talked to.

b. Taro met the girl whom Ken talked about.

この曖昧性は補文内の主語がない場合にはさらに顕著になり、(7)の日本語文の意味解釈は(7a-c)の 3 通り可能である。

(7) タロウは本を買った学生に会った.

a. Taro met the student who bought a book.

b. Taro met the student from whom he bought a book.

c. Taro met the student for/to whom he bought a book.

d. * Taro met the student bought a book.

この解釈の曖昧性は日本語が *pro-drop* 言語であることから来るもので[9]、日本語の関係代名詞節に wh-移動を想定する必然性が乏しいことを示す現象である[2]。また、日本語の関係節は wh-移動に一般的に課される下接の条件に抵触してもなんら差し支えないことが指摘されてきた[10]。(8)は関係節内の要素がさらに関係詞化された例である。

(8) [$_{NP}$ [$_{CP}$ [$_{NP}$ [$_{CP}$ [e_i e_j 着ている]] 洋服 $_j$] が汚れている] 紳士 $_i$]　　(Murasugi 1991: 116[11]より)

(4d)は「gapless relative」といわれるタイプの構文で、主要部名詞と同一指標を持つ gap が関係節内に存在しない例である[10), 12), 13]。さらに、日本語では英語の関係節にあたる(9a)(=4d)と、いわゆる「同格の that-節」にあたる(9b)の間に構造上の違いは存在しない。

(9) a. タロウは[[父親が有名な本の著者である]少女]に会った.

b. タロウは[[父親が有名な本の著者である]事実]を明かした.

(9a)では、関係詞節である補文内に、関係詞化によって抜き出された名詞句の痕跡（gap）が存在しないが、日本語の文としては適格文である。Tsujimura (1996)は Kitagawa (1982)[14]を引用し、このタイプの関係節では関係節と主要部名詞との関係が統語的なものではなく、修飾関係は意味的・語用論的に決定される(p. 268)としている。これに加え、日本語では表面的には(4a-e)と同じ構造を持つ連体修飾節が多様に可能である(Matsumoto 1997)[15]。

(10) a. 頭が良くなる本

b. 頭が良くなる催眠術師

c. ??頭が良くなる車　(Matsumoto 1997: 7 より)

Matsumoto (1997)は日本語の連体修飾節に英語と同じ Wh-移動分析を適用することに無理があることを指摘し、日本語の場合には全ての連体修飾節構造において主要部名詞と補文との関係が意味的（および語用論的）枠組み(semantic frame)によって決定されるとしている。(10a-c)の構造はどれも同じであるが、(10c)の容認度が低いのは主要部名詞「車」に補文の叙述「頭が良くなる」という意味的枠組みの中での意味役割を割り当てることが通常不自然であるからである[3]。

このように、日本語の関係節では wh-移動を伴うことを示す根拠が薄いこと、関係節を含む全ての連体修飾節構造が意味的・語用論的な制約によってとらえることができることからも、日本語の関係節は

[2] また、(7)の日本語を関係節内の主語が省略されたそのままの形で英語に置き換えると(7d)のように非文となる。

[3] (10a-c)はどれもそのままでは英語の関係節に置きかえることが出来ない。

ヨーロッパ諸言語における関係節構造とは異なるという見方がされている(Comrie 2002[2], 2007[16])[4]。

3. 第二言語における関係代名詞節の習得

第二言語（L2）における関係代名詞節の習得に関する研究の多くが上述の NPAH と習得順序について言及してきた（例：Gass 1979[17]；Schachter 1974[6]; Pavesi 1986[18]; Hamilton 1995[19]; Izumi 2002[4]）。例えば Eckman et al. (1988)[3]は 36 人の中級学習者を 4 グループに分け、そのうち 3 グループにそれぞれ(3a-c)のタイプの関係節のうちの 1 つを 1 時間で教えた。文結合テストで指導の前後にテストしたところ、(3c)のタイプの関係節を指導されたグループがテストされた全てのタイプの関係節において他のグループを上回る結果であった。このことから Eckman et al (1988)[3]は、L2 習得では有標性の高い項目を習得すると、より有標性の低い項目も習得する現象が見られるとした。また Pavesi (1986)[18]は第二言語環境で英語を自然に習得している学習者と、教室での指導を受けながら学習している学習者を比較し、前者に比べ後者の方が NPAH においてより下位の関係節まで習得が早く進行することを報告している[5]。いずれの研究も、L2 においても NPAH が示す階層性がみられることを指導の前後で示しており、このことは少なくとも関係代名詞節の習得については L2 習得が言語類型論的な議論において NPAH が唱える関係代名詞節の階層性という形で現れる何らかの普遍的な原理に従って進行することを示唆している(cf. J. Hawkins 2007[20])。

しかし、L2における関係節の習得でこれまで研究の焦点となってきた項目は非常に限られている。大部分の研究の対象となってきたのは(3a)（SU）、(3b)（DO）、および(3c)（O PREP）の 3 タイプであり、NPAHが唱える階層性に分類された関係節タイプだけを見ても、(3d)（GEN）や(3e)（O COMP）の習得について詳しく調べた研究は少ない。また、上述の先行研究ではL2学習者の母語がコントロールされていない上、学習者それぞれの母語の特徴についての検討もなされていない。よって母語における関係詞節（にあたる構造）が英語の関係詞節の習得に与える影響についても詳細な検討がなされてこなかった。本研究では、上述の日本語における名詞修飾節構造の特徴が日本語話者の英語関係節の習得にどのように影響しているのかを実験データから見てゆく。

4. JLE による関係代名詞節の習得

上述の先行研究をふまえれば、JLE が関係代名詞節を習得する場合には NPAH が示す階層に沿った形で習得が進むと考えられる[6]。もしそうであれば、我々の使用する(1a)のタイプの関係節は(1b)のタイプよりも習得がしやすいはずであり、(1b)は(1c)および(1d)の両タイプよりも習得しやすいことになる。しかし、属格関係代名詞節の(1c)と(1d)ではどのような習得順序が予想できるであろうか。先行研究ではこの両者を比較した研究はまだすくないが(cf, 伊藤 2001[5])、NPAH の階層性が L2 における関係代名詞節の習得順序を何らかの形で予測するという考えに立てば、(11)のような可能性（予測）が考えられる。

(11) (1a-b)がすでに習得できている学習者であれば、一旦 whose+N の形式の使用が出来るようになると(1c), (1d)はほぼ同時期に使用できるようになる.

(11)の予測は関係代名詞節が Wh-句の移動によって生成されるという従来の NPAH の考え方を前提としている。(1b)(OBJ)が正しく生成できる学習者にとっては whose+N の形で抜き出しが行えるようにさえなれば、(1c)と(1d)の間に難しさという点で差はないはずである。

---

[4] (4e)のような例が比較的容認度が低く感じられることは注意を要する点である。このことは、（少なくとも顕在的には）wh-移動を含まない日本語においても適用するという意味で、NPAH が唱える(3a-e)のタイプ内での階層性の普遍性を示唆していると言えよう。

[5] 意味理解や文法形式に焦点をあてた指導による学習効果が NPAH の分類の上でどのように見られるかについては Daughty (1991)[21]を参照。

[6] Keenan & Comrie (1977)が提案したのはあくまで言語類型論の上での関係節の階層性であり、この階層が即言語習得を支配しているという主張ではなかったという点は明確にしておかねばならない。しかし、第 3 章でも述べたように、その後の言語習得研究においてデータの整合性が相当程度示されてきていることも事実である。

しかし、もしNPAHが言う関係代名詞節の階層性がKeenan & Comrie (1977)が当初想定していた統語的な条件だけでなくより広範な言語処理上の条件から得られるものであるなら[20), 2)]、(12)の予測を立てることが可能である。

(12) (1c)（関係節内の主語の関係詞化）が(1d)（関係節内の目的語の関係詞化）より習得しやすく、比較的早い段階から使用できるようになる。

つぎに、第2章でも述べたように、英語の関係節にあたる構造は日本語においては意味的・語用論的解釈に重く立脚した連体修飾節構造のなかに含まれ、このことがJLEの関係節習得に影響する可能性がある。即ち、補文内に空所(gap)が存在しない(4d)のようなタイプの文では、主要部名詞と補文の関係を構築するとき、日本語の連体修飾節における意味解釈方略（文の生成においては生成方略）の使用が表出しやすくなることが予想でき、例えば(1d)のタイプで誤って空所のない(13)のような関係節を産出することが予想できる。

(13) *Tom visited the teacher (who/that) he found her textbook in the classroom.

5. 実験

5.1 参加者

実験に参加してもらった福島高専の5年生(19～21歳) 107人のうち、1年以上英語圏での留学を経験していた者1人、留学生（非日本語母語話者）4人、1つ以上のタイプの文に全く解答しなかった学生10人を除いた92人のデータを第1段階の分析の対象とした。第2段階として、TOEICのスコアによって20人のグループを3つ作り、最終的な分析の対象とした。これらの計60人の参加者のTOEIC平均スコアは425.9 (*SD* = 102.1) であった。スコアによるグループ分けの結果をTable 1に示す。

5.2 材料

(1a-d)の4タイプ（下に(14a-d)として再掲)の関係節を含む文をそれぞれ3文用意した。そこに錯乱文として関係節を含まない文を１０文含めた合計22文をでたらめに並べた後、それぞれの文をターゲットとする和文英作文テストを作成した。各問題にはそれぞれ状況を明確に示すための日本語による導入部を設けて使用し、使用すべき動詞を右側に示しておいた。(15)はタイプＡ、(16)はタイプＣの問題の例である。

Table 1: Participants' general fluency by TOEIC scores

	TOEIC score	*M*	*SD*
Intermediate (n = 20)	475-850	545.5	85.1
Lower intermediate (n = 20)	370-425	398.3	16.6
Beginner (n = 20)	315-350	334.0	10.2

(14) a. John met [a girl$_i$ [$_{CP}$ who$_i$ [$_{IP}$ e$_i$ had a big shopping bag]]]. （タイプＡ）

b. The police arrested [the thief$_i$ [$_{CP}$ whom$_i$ [$_{IP}$ John found e$_i$]]]. （タイプＢ）

c. John married [the girl$_i$ [$_{CP}$ whose mother$_i$ [$_{IP}$ e$_i$ was from Canada]]]. （タイプＣ）

d. Tom visited [the teacher$_i$ [$_{CP}$ whose textbook$_i$ [$_{IP}$ he found e$_i$ in the classroom]]]. （タイプＤ）

(15) 銀座の有名なデパートから高価なダイヤモンドが何者かに盗まれた。
警察はそのダイヤを盗んだ男を見つけ出した。
(steal-stole-stolen)
The police found the man *who had stolen the diamond.*

(16) トムは作家志望である。ある日、友人からある少女を紹介された。なんでも彼女の父親が書いた本がベストセラーになっているという。
トムは父親がその有名な本を書いた少女を訪れた。(write-wrote-written)
Tom visited the girl *whose father had written the famous book.*

5.3 手続き

上記の問題を用紙5ページに印刷しクラスごとに一斉に配布し、筆記による解答をさせた後で回収して分析した。参加者には導入部を読んでから下線の付された日本語部分を英語で表現する場合、空白になった（(15)-(16)の例では斜字体の）部分を補って英文を完成するように指示した。解答方法を理解してもらうため、関係節とは無関係の文で練習問題を１題解答した後で実験文の解答をしてもらった。解答時間に制限は設定せず全員が約２０分でテス

トを終了した。

5.4 分析

語の綴り、冠詞、時制およびアスペクトの誤りを無視し、関係節のその他の部分が正しく作文できていれば「1」点とし、各タイプでの満点を「3」点とした。また、解答のない問題は「0」とはせず、無効とした。その上で参加者ごとに各タイプの合計得点を有効解答数で除した値（最大1）を算出した。この値を Table 1 に示したグループごとに平均し、比較した。

また、上の分析で「誤り」と判断した解答を誤りの特徴によって分類した。

5.5 結果

参加者グループごとの4タイプの文における平均正答率を Table 2 に示す。

Table 2: Rates of correct responses in the Japanese-English translation task

	Type A		Type B		Type C		Type D	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
Int	0.8	0.2	0.8	0.3	0.6	0.4	0.1	0.2
L-I	0.7	0.2	0.8	0.3	0.5	0.4	0.0	0.1
Beg	0.7	0.4	0.5	0.4	0.2	0.4	0.0	0.1

Note: Int: Intermediate group; L-I: Low intermediate group; Beg: Beginner group

同じデータを視覚的に示したのが Figure 1 である。

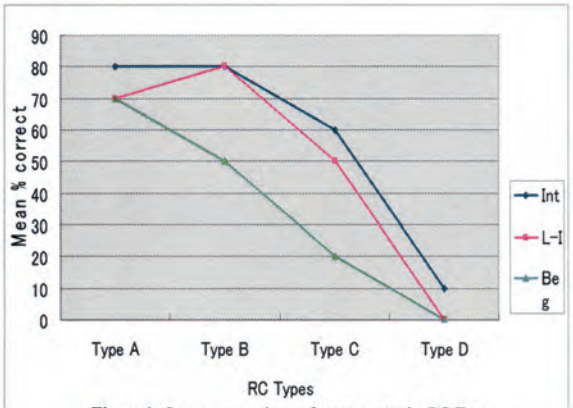

Figure 1: Group comparison of mean scores by RC Types

1 要因（参加者グループ）が独立し、1 要因（文タイプ）に対応のある二元配置の分散分析を行った結果、参加者グループ間効果(F (2, 57) = 5.435, p = .007)が有意であった。ペアごとの比較における有意確率は Intermediate グループ対 Beginner グループの比較のみが有意で(p = .002)、その他の2つの比較は有意ではなかった(Intermediate vs. Low intermediate: p = .109; Low intermediate vs. Beginner: p = .101)。RC タイプ間の効果は有意であったため(F (3, 171) = 64.07, p = .000)、主効果を特定するためのペア比較を行った。その結果を Table 3 に示す。

Table 3: Results of the post-hoc paired comparisons of RC Types by LSD in *P* value

	Type B	Type C	Type D
Type A	.575	.000	.000
Type B	---	.000	.000
Type C	---	---	.000

Table 3 から、Type A と B の比較では有意差はなかったが、他の各ペア比較において有意差があったことが分かる。

また、RC タイプと参加者グループの交互作用は有意でなかった(F (6, 171) = .907, p = .491)。

次に、参加者のおかした誤りの RC タイプごとの分布を調査し、大きく 8 種類の誤りに分類した。(17)－(24)ではそれぞれ a が学習者の誤り例、b が正答となるターゲット文である。参加者グループごとの誤りの分布とそれぞれの誤りタイプの全有効回答数に対する割合を RC タイプ別に示したのが Table 4-7 である。

(17) 態の交換　(Voice alternation)

a. #The police arrested the thief who was found by John.

b. The police arrested the thief (who(m)) John found.

(18) 主格関係代名詞の脱落 (RP omission)

a. *Susan employed the engineer fixed the network.

b. Susan employed the engineer who fixed the network.

(19) 主語の脱落 (Sub. omission)

a. *Tom visited the teacher missed the class.

Table 4: Distribution of error types for RC Type A

	Intermediate		Low-Int		Beginner	
		(%)		(%)		(%)
RP omission	8	(13.8)	9	(17.0)	11	(20.8)
Gapless wh-clause	0	(0.0)	0	(0.0)	2	(3.8)
Gapless that-clause	1	(1.7)	0	(0.0)	4	(7.5)
Voice alternation	4	(6.9)	4	(7.4)	1	(1.9)
Others	0	(0.0)	4	(7.4)	0	(0.0)
Total No. of Errors	13	(22.4)	17	(31.5)	18	(33.9)
Total No. of Responses	58	(100)	54	(100)	53	(100)

Table 5: Distribution of error types for RC Type B

	Intermediate		Low-Int		Beginner	
		(%)		(%)		(%)
Gapless wh-clause	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)
Gapless that-clause	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
Voice alternation	13	(22.4)	10	(18.5)	10	(19.6)
Others	2	(3.5)	2	(3.7)	5	(9.8)
Total No. of Errors	16	(27.6)	12	(22.2)	15	(29.4)
Total No. of Responses	58	(100)	54	(100)	51	(100)

b. Tom visited the teacher whose class he missed.

(20) Wh-関係詞＋再述代名詞 (Gapless wh-clause)

a. *John met a girl who she had a big shopping bag.

b. John met a girl who had a big shopping bag.

(21) that-節 (Gapless that-clause)

a. *Mike visited an old lady that she had broken (her) leg in the accident.

b. Mike visited an old lady who had broken her leg in the accident.

(22) ゼロ関係詞節 (Gapless ∅ -clause)

a. *Ken met a doctor his daughter married a famous actor.

b. Ken met a doctor whose daughter married a famous actor.

(23) 属格関係詞のみの脱落(Genitive relative omission)

a. *Noriko met the singer who she bought CDs.

b. Noriko met the singer whose CDs she bought.

(24) その他 (Others)

a. *Mike visited an old lady who was broken her leg by the accident.

b. John met a girl having the shopping bag.

RC Type B に対する誤りの分布を Table 5 に示す。RC Type B においては、関係代名詞脱落は正答となる。また、RC Type A で見られたような主語脱落文および Gapless 文の that-節による誤りは少なく、誤りのほとんどが関係節部分を(17)の例のように受動態に変えてしまったもの(Voice alternation)であった。

RC Type C に対する誤り(Table 6)には上記の他の RC Type に対する誤りとは異なり、(25)のように whose+N の形ではなく who を用いて補文内の主語を関係代名詞化して誤って対応したもの(Case alternation)が含まれていた。これは RC Type B でわざわざ主格関係代名詞構文を用いた誤りと同様の方略とみなすことができよう。また(26)のような Gapless 関係節（(20)-(22)も参照）を含むものが比較

Table 6: Distribution of error types for RC Type C

	Intermediate		Low-Int		Beginner	
		(%)		(%)		(%)
RP omission	1	(0.0)	1	(1.8)	1	(5.5)
Gapless wh-clause	3	(5.2)	3	(5.4)	5	(9.3)
Gapless that-clause	3	(5.2)	4	(7.1)	8	(14.8)
Gapless ∅ -clause	0	(0.0)	1	(1.8)	3	(5.6)
Case alternation	13	(22.4)	9	(16.1)	8	(14.8)
Others	5	(8.6)	14	(25.0)	8	(14.8)
Total No. of Errors	25	(43.1)	32	(57.1)	35	(64.8)
Total No. of Responses	58	(100)	56	(100)	54	(100)

Table 7: Distribution of error types for RC Type D

	Intermediate		Low-Int		Beginner	
		(%)		(%)		(%)
Sub. deletion	5	(8.6)	0	(0.0)	5	(9.4)
Gapless wh-clause	5	(8.6)	4	(7.4)	11	(21.2)
Gapless that-clause	10	(17.2)	10	(18.5)	15	(28.8)
Gapless ∅ -clause	6	(10.3)	4	(7.4)	2	(3.8)
Gapless GP omission	7	(12.1)	4	(7.4)	15	(28.8)
Case alternation	21	(36.2)	26	(48.1)	10	(19.3)
Others	7	(12.1)	9	(16.7)	7	(13.5)
Total No. of Errors	53	(91.4)	51	(94.4)	50	(96.2)
Total No. of Responses	58	(100)	54	(100)	52	(100)

Note: Genitive pronoun omission may overlap with other Gapless cases.

的多く含まれていた[7)]。

(25) a. #John married the girl who was from Canada.

b. John married the girl whose mother is from Canada.

(26) a. *Ken met a doctor his daughter married a famous actor.

b. *Susan met the writer the book has won the Naoki Prize.

c. *Ken met a doctor who his daughter have married a famous actor.

d. *John married a girl that her mother is from Canada.

[7)] (26c)のように関係詞の位置に wh-詞が使われていて、なおかつ補文内の代名詞が顕在的に用いられた場合 Wh-clause に分類した。

6. 考察

まず RC タイプごとに得られた正答率（Figure 1）から、Type C および Type D が Type A および Type B に比較して難しいことが分かる。Type A と Type B のペア比較では有意な差がなかったが、Type C と Type D のペア比較では有意差が検出された。このことは今回の参加者の英語中間文法が、主格と目的格の単純な関係代名詞構文を習得している一方で、属格関係代名詞構文は未だ習得が進んでいない状態にあることを示唆している。この観察は先行研究において、L2 の関係代名詞構文の習得が NPAH の階層性に従うという見解に沿ったものである。さらに、Type A と Type B において高い割合で正答を出した Intermediate ならびに Low-intermediate グループの学習者でも Type C と Type D の間にも統計的に

有意な差が見られたことは、日本人英語学習者の関係代名詞節の生成においても義務的 wh-移動が主要な役割を果たしている、とする見解に疑問を投げかける。

つぎに学習者がおかした誤りについて検討したい。すでに述べたように、日本語の名詞句修飾節構造の方略が英語の関係節の生成に用いられる場合、特に Gapless 関係節を産出する誤りが予想される。Table 4-7 のデータからは正にこのことが伺える。Type A,B では名詞句がそのまま関係詞化され、対応する日本語においても当該の名詞句は空所となるため、Gapless の解答はほとんど現れないのは当然であろう。しかし、Type C, D では関係詞化されるべき所有格代名詞（属格）とその後の名詞が結束して先行詞と同指標を持つため、処理が難しい。また日本語では Gapless 文で対応できる意味構造のため、表面的に wh-語 や that を接続詞として用い、補文はそのままつなげる形をとる誤りが多く産出されている。日本語の名詞句修飾節でいわゆる英語の関係詞節にあたるものと同格の that-節にあたるものの間に違いがないことも大きな要因となっていると考えられる。この観察が正しければ、日本人英語学習者が関係節を習得する過程では、言語類型論において提唱されてきた普遍的階層性である NPAH の影響下で習得が進行する一方で、母語である日本語の名詞句修飾節構造の生成方略をひきずってゆくということが言えそうである。

ここで考えなければならない点は、Gapless 関係節として分類した誤りが実は wh-移動と再述代名詞であり、wh-移動を持つ言語の母語習得においても観察される現象ではないか、という視点である。実際に次のような誤りが観察された。

(27) a. *Mike visited an old lady she broke the leg by the accident.
b. *John met a girl who she had a big shopping bag.
c. *Susan met the writer that his book won the Naoki Prize.
d. *John married the girl who her mother had come from Canada.
e. *Noriko met the singer that Noriko bought her CDs.

しかし、英語の母語習得では that-関係節よりも wh-関係節が好まれ、この種の再述代名詞の産出はほとんど見られない（見られても発達段階の非常に早い時期に限られる）[22), 23)]。また、（27a, b)のような主語位置からの関係詞化を含む文では再述代名詞は産出されないのが普通であるが[24)]、今回の参加者から得たデータでは、主語位置からの関係詞化において(28)のような主語あるいは関係詞を脱落させる誤りが全てのグループで観察された。

(28) a. *Susan employed the engineer fixed the network.
b. *Mike visited an old lady broke her leg by accident.
c. *Tom visited the teacher whose class missed.

このことは、本実験の参加者の多くが日本語の名詞句修飾節構造の方略、すなわち *pro-drop* と意味的/語用的枠組みによる補文の接続方略を英語の関係節の生成のためのオプションとして残していることを示唆している。

さらに上の考察は、日本人英語学習者が関係代名詞節を習得する際に義務的な wh-句移動を習得しているのか、という問題に我々を引き戻す。今回のデータからはこの問いに正面から答えることはできない。しかし、日本人英語学習者の関係節においては一般的に wh-移動に課せられる制約（例：下接の条件）が守られていないという研究結果も報告されている[25)]。彼らが関係代名詞構文を産出するときの正確さが NPAH の予測に沿っていたことと彼らの関係節に義務的な wh-移動が欠けているという見解は、すでに第 4 章で述べたように矛盾するものではない。この問題の真相にせまるためには日本人学習者の中間文法における *pro-drop* の状態に焦点を当て、本実験で用いた以外のタイプの文やデータ収集法を用いたさらなる研究が必要であろう。

謝辞

本研究は平成 22～25 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））課題番号: 22320101、「第二言語習得の研究成果に基づく効果的な英語教授法・指導法の開発」、研究代表者：白畑知彦（静岡大学）の補助をうけている。

文　献

1) Keenan, E. and Comrie, B. (1977). Noun phrase accessability and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry, 8,* 63-99.

2) Comrie, B. (2002). Typology and language acquisition: The case of relative clauses. In Ramat, A. Giacalone (ed.), *Typology and second language acquisition.* (pp. 19-37). Berlin: Mouton de Gruyter.

3) Eckman, F. R., Bell, L., and Nelson, D. (1988). On the generalization of relative clause instruction in the acquisition of English as a second language. *Applied Linguistics, 9,* 1-20.

4) Izumi, S. (2002). Output, input enhancement, and the Noticing Hypothesis: An experimental study on ESL relativization. *Studies in Second Language Acquisition* 24: 541-577.

5) 伊藤彰浩. (2001).「共時的アプローチによる英語関係節の習得研究」. 東京: リーベル出版.

6) Schachter, J. (1974). An error in error analysis. *Language Learning* 24: 205-214.

7) 岸本秀樹・菊池 朗. (2008).「叙述と修飾」. 英語学モノグラフシリーズ５. 東京: 研究社.

8) Tsujimura, N. (1996). *An introduction to Japanese linguistics.* Cambridge MA: Blackwell Publishers.

9) Saito, M. (1985). *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications.* Ph.D. dissertation, MIT.

10) Kuno, S. (1973). *The structure of the Japanese languages.* Cambridge, MA: MIT Press.

11) Murasugi, K. (1991). *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition.* Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

12) Mikami, A. (1960). *Zoo wa hana ga nagai.* Tokyo: Kuroshio Publishers.

13) Teramura, H. (1971). The syntax of noun modification in Japanese. *Journal-Newsletter of the Association of Teachers of Japanese* 64-74.

14) Kitagawa, (1982). Topic constructions in Japanese. *Lingua* 57: 175-214.

15) Matsumoto, Y. (1997). *Noun-modifying constructions in Japanese: A frame-semantic approach.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing.

16) Comrie, B. (2007). The acquisition of relative clauses in relation to language typology. *Studies in Second Language Acquisition, 29,* 301-309.

17) Gass, S. M. (1979). Language transfer and universal grammatical relations. *Language Learning, 29,* 327-344.

18) Pavesi, M. (1986). Markedness, discoursal models, and relative clause formation in a formal and informal context. *Studies in Second Language Acquisition, 8,* 38-55.

19) Hamilton, R. L. (1995). The noun phrase accessibility hierarchy in SLA: Determining the basis for its developmental effects. In Eckman, F. R., Highland, D., Lee, P. W., Mileham, J. and Weber, R. R. (eds.), *Second language acquisition theory and pedagogy* (pp. 101-113). Mahwah, NJ: Erlbaum.

20) Hawkins, J. (2007). Acquisition of relative clauses in relation to language universals. *Studies in Second Language Acquisition* 29: 337-344.

21) Daughty, C. J. (1991). Second language instruction does make a difference: Evidence from an empirical study of SL relativization. *Studies in Second Language Acquisition, 13,* 431-469.

22) Labelle, M. (1988). Predication et mouvement: Le developpement de la relative chez les enfants francophones [Predication and movement: Development of the relative clause in French-speaking children]. Doctoral dissertation, University of Ottawa.

23) Labelle, M. (1990). Predication, wh-movement and the development of relative clauses. *Language Acquisition* 1: 95-119.

24) Pérez-Leroux, A. T. (1995). Resumptives in the acquisition of relative clauses. *Language Acquisition* 4: 105-138.

25) Hawkins, R. and Hattori, H. (2006). Interpretation of English multiple wh-questions by Japanese speakers: A missing uninterpretable feature account. *Second Language Research* 22: 269-301.